

# ひと

難民映画祭を企画する

Kirill Konin

キリル・コニン さん(31)



難民を題材にした世界各国のドキュメンタリーや映画を集めた「第3回難民映画祭」が20日から東京都内各地で始まる。その仕掛け人だ。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所の職員として、06年の1回目から企画立案してきた。「僕自身、統計のデータを通してではなく、生身の難民と出会うこと

で難民問題を実感できた。ふつうの人も、映画の中でならイラクや（スーダンの）ダルフルの難民に会いに行ける」

出張や休暇を使ってベルリンやベネチアなどの映画祭に出向き、出品を交渉した。約40作品のうち半数近くが日本初公開。ウガンダの元少年兵らがダンスを通じて自分を取り戻す姿を描いた米ドキュメンタリー「ウオー・ダンス」もその一つだ。

ロシア・ウラル地方出身。大学院生のとき、社会学の現地調査で南アフリカへ。貧しくても希望を失わない子どもたちの姿に、アフリカに抱いていた暗いイメージが一変した。

その後、タイに住むアフリカ難民の子どもに教育を受けさせるプロジェクトを立ち上げ、津波被災者の支援もかかわった。カンボジアでのUNHCR勤務時代に映画祭を企画したことを買われ、06年に来日した。

「登場する難民の多くは、すべてを失っても絶望せず、生き続けようとする力を持っている」。映画祭は、国際化を唱えながらも難民の本格的な受け入れは拒み続ける日本社会への問いかけにもなっている。

文・石倉弓 写真・鬼室黎